

# 小離島における母子相談の内容

— 5年間の推移について —

荒木 美幸<sup>1</sup>・大石 和代<sup>1</sup>・岸 英子<sup>2</sup>・平山のり子<sup>3</sup>・松山 恵美<sup>3</sup>

**要 旨** 長崎県・大島村において、小児科医による乳幼児健康診査の実施前後における母子相談の状況と内容の変化について調査した。対象は63名である。その結果、母子相談件数は年々増加する傾向にあった。母子相談の内容については、1. 症状・疾病に関するもの 2. 発達・発育に関するもの 3. 栄養・食事に関するもの 4. 保育に関するもの 5. 母親の健康・家族に関するものの5項目に分類でき、変化はみられなかった。しかし5項目ごとの相談内容は多様化してきており、今後はより個別的で幅の広い育児支援を行う必要があると考えられた。

長崎大医療技短大紀 12: 77-81, 1998

**Key Words** : 大島村, 母子相談, 乳幼児健康診査

## はじめに

長崎県・大島村は、長崎県の西北端に位置し、平戸市から村営フェリーで35分の距離にある。1996（平成8）年度の人口は677世帯1916人で、年間出生数が10人の小離島である。村の医療機関としては村立診療所（内科医師1名、看護婦3名）および村立歯科診療所（歯科医師1名）があるのみで、産婦人科・小児科の専門医はいない。したがって、村の乳幼児健康診査は村立診療所医師および保健所医師が担当し、専門医療機関が遠方であることから小児科医による医療機関委託乳児一般健康診査の受診率は非常に低いものであった。そのため、母親たちの育児不安を軽減する目的で、乳幼児をもつ母親・家族を対象に乳幼児の身体測定と育児相談を行う母子相談（担当者：保健婦、栄養士、母子保健推進員）を年8回、平成3年度より開始した。

その後村では、平成7年度に小児科医の派遣による定期的な乳幼児健康診査事業を策定し、平成8年度から実施しているが実施後も母子相談は引き続き行われている。<sup>1)</sup>

本研究では、平成5、6年度と平成7、8、9年度の母子相談状況と内容を比較した。また母子相談をさらに住民のニーズにあったものとするために、現在の母子相談の内容変更の必要性についても検討する。

## 対象および方法

対象は平成5年度から平成9年度の5年間に、長崎県・大島村で行われた乳幼児健康診査、母子相談の中で、生後1ヵ月から12ヵ月の乳児について受診した63名の母親たちである（5年間の出生数は68名）。乳幼児健康診査、

母子相談で使用している母子カードから相談内容のみを抽出した（母子カードの記載内容は、身体計測値、栄養状態、排便状態、所見・相談事項、診察・指導他）。小児科医による乳幼児健康診査の実施前後における母子相談の状況と内容の変化について明らかにするために平成5、6年度と平成7、8、9年度の相談内容を比較した。

## 結 果

### 1. 母親の属性

表1に母親の属性を示した。全体では母親63名中、初産婦28名、経産婦35名で平均年齢は29.26歳だった。平成5、6年度の母親は初産婦7名（28%）、経産婦18名（72%）で平均年齢は29.76歳、平成7、8、9年度の母親は初産婦21名（55%）、経産婦が17名（45%）で平均年齢は28.76歳であった。平成5、6年度の母親は平成7、8、9年度の母親に比べて圧倒的に経産婦が多かった。（ $p < 0.05$ ）。世帯の特徴については平成5、6年度

表1. 母親の属性（n=63）

	平成5、6年度	平成7、8、9年度	有意差
初経産婦			
初産婦	7 (28)	21 (55.3)	$p < 0.05$
経産婦	18 (72)	17 (44.7)	
平均年齢	29.76	28.76	なし
家族形態			
複合家族	18 (72)	25 (65.8)	なし
核家族	7 (28)	13 (34.2)	

1 長崎大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻

2 長崎大学医療技術短期大学部看護学科

3 大島村役場

が複合家族18名(72%),核家族が7名(28%)で平成7,8,9年度が複合家族25名(66%),核家族が13名(34%)で複合家族が多かった。

## 2. 母子相談実施状況

表2に母子相談実施状況を示した。平成5年度から平成9年度までの年度別の出生数,母子相談の回数,延人数,母子相談に訪れた各年度別ごとの平均人数,延相談数,平均相談件数である。平均相談件数を見てみると,平成5年度は1回当たり1.8件の相談があり以下,平成6年度が5件,平成7年度が3.6件,平成8年度が4.1件,平成9年度が8.9件だった。つまり母子相談回数が極端に少ない平成6年度を除いては,平均相談件数は年々増加傾向にあることがわかった。

表2. 母子相談実施状況

	出生数	回数	延人数	平均人数	延相談数	平均件数
平成5年度	14	13	108	8.3	23	1.8
平成6年度	10	4	34	8.5	20	5.0
平成7年度	16	9	78	6.7	32	3.6
平成8年度	15	8	68	8.5	33	4.1
平成9年度	13	8	75	9.4	71	8.9

## 3. 母子相談内容の比較

平成5年度から平成9年度の5年間の母子相談内容を図1に示した。延数179件の相談があり相談内容を分類した結果,各年度とも5項目に分けられた。症状・疾病に関するものは117件(65%),発達・発育に関するものは21件(12%),栄養・食事に関するものは17件(10%),保育に関するものは11件(6%),母親の健康・家族に関するものは13件(7%)だった。平成5,6年度の2年間の相談人数は25名で延数43件の相談があり,平成7,8,9年度の3年間の相談人数は38名で延数136件の相談があった。

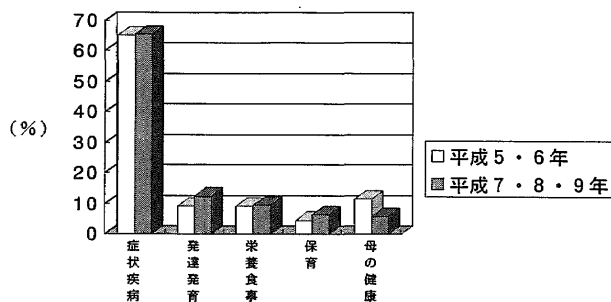


図1. 母子相談の内容の比較

相談内容として最も多かった項目は各年度とも症状・疾病に関するもので,平成5,6年度は延数28件(65%),平成7,8,9年度は延数89件(65%)だった。発達・

発育に関するものは平成5,6年度は延数4件(9%),平成7,8,9年度は延数17件(13%)だった。栄養・食事に関するものは平成5,6年度は延数4件(9%),平成7,8,9年度は延数13件(10%),保育に関するものは平成5,6年度は延数2件(5%),平成7,8,9年度は延数9件(7%)だった。母親の健康・家族に関するものは平成5,6年度は延数5件(12%),平成7,8,9年度は延数8件(6%)だった。平成5,6年度と平成7,8,9年度とでは相談内容の5つの項目の割合に有意差は見られなかった。

相談内容5項目のそれぞれの内容については,以下のような結果が見られた。

## 4. 症状・疾病の内容(図2)

症状・疾病に関するものの中で最も多かった内容は,平成5,6年度と平成7,8,9年度とも湿疹,おむつかぶれ,乾燥肌などの皮膚症状であり,平成5,6年度は延数28件の中で9件(32%),平成7,8,9年度は延数86件の中で38件(44%)だった。下痢や便秘症状については平成5,6年度は延数2件(7%)で平成7,8,9年度は延数10件(12%),嘔気・嘔吐については平成5,6年度は1件(4%),平成7,8,9年度は延数8件(9%)だった。次に眼脂については平成5,6年度は延数3件(11%),平成7,8,9年度は延数6件(7%)だった。その他は,平成5,6年度は発熱・風邪症状やのどにつかえた感じがするなどという気管の炎症症状,ヘルニア,振戦などがあり,平成7,8,9年度は発熱・風邪症状や気管の炎症症状,ヘルニアの他に陰のう水腫,腸炎,頭血腫,よだれについてとさまざまな相談がみられた。

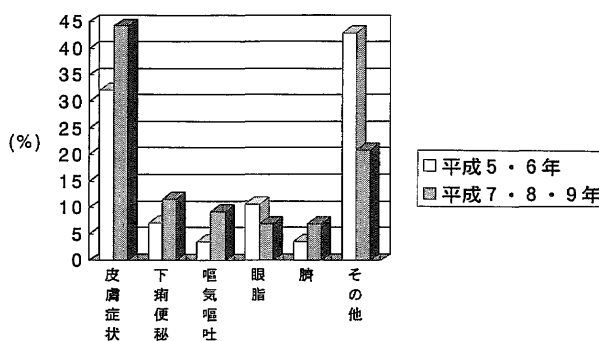


図2. 症状・疾病の内容

## 5. 発達・発育の内容

発達・発育に関するものではハイハイ,おすわり,寝返り,言葉が遅いなどの発達遅延についての相談があり,平成5,6年度は延数4件の中で1件,平成7,8,9年度は延数17件の中で7件だった。指しゃぶりについては平成5,6年度は1件,平成7,8,9年度は延数4件あり,左向きが多いなどの向き癖については平成5,6年度は延数2件,平成7,8,9年度は1件だった。

性格が怒りっぽいという相談は平成7, 8, 9年度のみに見られた。

## 6. 栄養・食事の内容

栄養・食事に関するものの中で最も多かった内容は各年度とも離乳食で、平成5, 6年度は延数4件の中で3件、平成7, 8, 9年度は延数13件の中で7件だった。母乳を飲まない、授乳に時間がかかるなどの授乳については平成5, 6年度は1件、平成7, 8, 9年度は延数5件だった。水分補給についての相談は平成7, 8, 9年度のみ1件あった。

## 7. 母親の健康・家族の内容

母親の健康・家族に関するものでは、上の子の育児については平成7, 8, 9年度のみ延数8件の中で4件、貧血や月経が来ないなどの母親の身体については平成5, 6年度は延数5件の中で4件、平成7, 8, 9年度は延数2件あった。育児担当者がいない、両親との育児方針との違いについては平成7, 8, 9年度のみが1件、育児ストレス発散法については平成5, 6年のみ1件あった。

## 8. 保育の内容

保育に関するものでは寝付きが悪い、夜中に起きるなどの睡眠については平成7, 8, 9年度のみ延数12件の中で8件の相談があった。おしゃぶりを離さないという相談は平成7, 8, 9年度のみ延数2件、おんぶについては平成5, 6年度は延数2件中1件、平成7, 8, 9年度は1件だった。冷凍母乳の保存については平成7, 8, 9年度のみが1件あり、予防接種については平成5, 6年度のみ1件あった。

## 考 察

大島村では平成7年度から小児科医派遣による乳幼児健康診査事業が策定され、平成8年度から実施されている。小児科医による専門的な乳幼児健康診査が導入されることにより母子相談の状況、内容がどのように変化するかを、母子カードから情報収集し、分析を行った。母子相談回数が極端に少ない平成6年度を除いては母子相談平均件数は年々増加傾向にあった。これは小児科医による乳幼児健康診査と母子相談とでは母親たちが期待するものが異なるからではないかと考えられる。渋谷は、「乳幼児健診受診者の多くは健康な乳幼児である。したがってこれらの保護者が期待することは疾病の発見よりむしろ健康であることを確認することにあるのではないだろうか」と述べている。<sup>2)</sup> 母親たちにとって小児科医による診査は、子供の成長・発達を専門的な視点で確認してもらう場であるとともに、子供の健康を保証してもらう場であるともいえる。

母子相談の内容を分類した結果、平成5, 6年度の母

親と平成7, 8, 9年度の母親とも症状・疾病に関するもの、発達・発育に関するもの、栄養・食事に関するもの、保育に関するもの、母親の健康・家族に関するもの、の5項目に分類でき、それぞれの項目の割合に年度差は見られなかった。小児科医による乳幼児健康診査時に、母親たちは乳幼児の症状・疾病に関するものや発達・発育に関するものなどの医学的な相談を行い、それにより母子相談時にそれらに関する相談が減るのではないかと予想されたが、実際には母子相談の内容が変化することはなかった。大島村で行われている母子相談というのは、身体測定・育児相談の2つが繰り返されているため、その中で小児科医が加わってもシステム自体は変わっておらず、よって母子相談の内容に変化はみられなかったと考えられる。しかしながら症状・疾病に関する内容の相談は他の相談内容に比べ群をぬいて多く、相談内容の充実という意味では強化する部分であると言える。

5項目ごとの相談内容は多様化してきている。これは大島村では有意差はみられないものの、核家族化が少しずつではあるが進んでいることもあり、子育て家庭を取り巻く環境の変化に伴い、母親たちの育児不安が多様化してきているのではないかと考えられる。<sup>3)</sup>

以上のことから、大島村では母子相談のニーズは年々高くなっており、今後も母子相談は継続していく必要がある。とくに小離島のため情報交換が難しく、また核家族化が進んでいるとはいえ、以前複合家族が多いという特徴をふまえて育児方針の違いから生じる母親たちの不安や、村外から転入してきた核家族の母親たちの孤立、育児不安への対応を含めた幅の広い育児支援も注目すべき点である。

## おわりに

これまで保健所が主体となって実施してきた母子保健サービス事業は、1997(平成9)年度より市町村に委譲された。これに伴い、市町村では地域に密着した独自の母子保健計画の策定が進められている。このような状況下、大島村では平成7年度に「大島村母子保健対策システム」を計画策定、平成8年度から実施している。今回平成5年度から平成9年度までの5年間に大島村の乳幼児健康診査、母子相談を受診した母親63名に対し母子相談の状況と内容の変化について調査した。住民のニーズが高かった小児科医による乳幼児健康診査が平成7年度に策定、平成8年度から導入されたが、母子相談を受診する母親は年々多くなっていった。したがって、大島村の住民にとって母子相談は母子保健対策システムの中でニーズが高く、これからも継続していく必要があると考えられる。その中でも、相談内容として母親たちは症状・疾病に関することを求めており、小児科医の導入にかかわらず強化しなければならない内容であることがわかった。

今後は、それぞれの住民のニーズに合った幅の広い育児支援を行うとともに、母親たちが母子相談を受診する

ことによって仲間との交流や情報交換を行いやすいような場を作ること重要であると考えられる。

#### 文 献

1. 大石和代, 門司和彦: 離島における母子保健推進システム事業の実際—地域医療の最前線. 長崎大学公開講座, 107-111.
2. 渋谷いずみ: 特集 乳幼児健診の意義の変遷—疾患のスクリーニングから育児支援へそして評価へ—. 公衆衛生 61 (4): 238, 1997.
3. 清田京子, 高橋こずえ: 特集 新しい地域保健の視点—実践例に学ぶ方法論. 公衆衛生 62 (1): 27, 1998.

Contents of mother — Child counseling on a small, remote island

Miyuki ARAKI<sup>1</sup>, Kazuyo OHISHI<sup>1</sup>, Eiko KISHI<sup>2</sup>,  
Noriko HIRAYAMA<sup>3</sup>, and Emi MATSUYAMA<sup>3</sup>

1 Department of Midwifery, School of Allied Medical Sciences, Nagasaki University

2 Department of Nursing, School of Allied Medical Science, Nagasaki University

3 Ooshima Village office

**Abstract** Changes in the situation and contents of mother-child counseling before and after health guidance given infants by a pediatrician in Ooshima Village, Nagasaki Prefecture were examined.

In consequence, the numbers of counseling sessions tended to increase.

The types of mother-child counseling were divided into five categories :

symptoms and sickness. healthy development and growth. nutrition and meal. day care, and health of the mother and family.

Because the contents of each category vary markedly, it is necessary to provide individual and broad child care support.

Bull. Sch. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 12: 77-81, 1998

**Key Words** : Ooshima Village mother-child counseling health guidance infant